

# 幼児教育における歌唱指導と表現活動

阪口 さやか  
四條畷学園短期大学

Teaching of Singing and Musical Expression Activity for Nursery Education

Sayaka Sakaguchi  
Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第50号 別刷  
平成29年12月25日



## 幼児教育における歌唱指導と表現活動

阪口 さやか\*

### Teaching of Singing and Musical Expression Activity for Nursery Education

Sayaka Sakaguchi

#### 【乳幼児と音楽の関わり】

乳幼児にとって音楽は、日常から切り離せないものである。

例えば、母親から歌ってもらい子守歌、友達や家族、先生との触れ合いの中で行われるわらべ歌、テレビを観ていても様々な音楽で溢れている。

乳幼児の心身の発達は非常に著しく、目や耳や身体でたくさんの事を感じ取り、即座に吸収する。そしてそれがいっぱいになると、外へ現そうとする意欲が生まれる。この意欲こそが表現活動に繋がるのである。

乳幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる非常に重要な時期である。そのため保育者は、子供たちの発達段階に即した、出来るだけたくさんの良い音楽を保育に取り入れ、豊かな感性や表現する力を養う環境をつくる事が必要とされる。

実際に幼稚園において歌唱指導を行っているが、その経験は保育士を目指す学生に指導する上でも非常に貴重なものとなっている。ここでは自身の指導の経験に基づき、主に3歳～6歳の幼児を対象にした音楽教育について述べたい。

#### 【幼児を対象とした歌唱指導法】

歌うという事は、その歌に込められた感情や情景を表現したり、音程やリズム感を育てる上で非常に重要な活動である。

歌唱指導の際には指導案を綿密に考案するが、新しい生活に不安や戸惑いがあり、まだ集団で歌うという事に慣れていない年少児には、子供達に馴染みのある動物の歌や、先生との触れ合いをテーマにした歌を取り入れる等、工夫を凝らす。「こと

りのうた」(作詞:与田準一 作曲:芥川也寸志)、「せんせいとおともだち」(作詞:吉岡治 作曲:越部信義)、「べんぎんちゃん」(作詞:まどみちお 作曲:中田喜直)などが挙げられる。

ある程度長い歌詞が歌えるようになる年長児には、正しい言葉で一人でも自発的に歌えるような曲を選曲する。「ママとゴーゴー」(作詞:丘灯至夫 作曲:越部信義)、「12月だもん」(作詞:山元護久 作曲:山本直純)などが挙げられる。

また、1フレーズで息が続くかどうか、音程に無理はないかなど、学年や季節に合わせて様々な事を考え、吟味した上で選曲する必要がある。

新しい歌を取り入る際には、始めは歌って聴かせる。その際、子供達はその歌の詞について自分なりに解釈し、各々に情景を想像させる必要がある。絵等があれば見せると分かりやすいが、絵等がなく、口頭の説明だけであったとしても、子供たちが歌のイメージをしっかりと膨らませる事が出来るよう、分かりやすく話す必要がある。そうする事により、その歌に対する興味をもたせる工夫をしなければならない。興味を持たせることにより、幼児の、自ら歌いだしたい、表現したいという意欲を引き出す援助をしていく事が重要である。

次に歌唱法であるが、歌うときに注意しなければならないのは声の出し方である。幼児に「大きな声で元気に歌いましょう」と言うと、必要以上に怒鳴るような張り上げた声で歌ってしまう事が多い。しかし、このような歌い方を続けると、喉に非常に負担がかかってしまい、痛めてしまう恐れがある。そのため、歌唱指導の際には、出来るだけ頭声で歌うように指導する事が望ましい。

これは年少時から行っているが、初めはすぐに

\* 四條畷学園短期大学 非常勤講師

出来るものではない。しかし、何度か指導者側が頭声で歌って聴かせると、ほとんどの子供が頭声になる。

歌に限らず、幼児の大きな特徴の一つとして、大人の模倣を非常によくするという事が挙げられる。これは、単なる物真似ではなく、子供にとって大人は、良くも悪くも常にお手本であるということである。大人を観察し、学び、無差別に吸収し得た情報を自ら最大限表現しようとするのである。

この事から、子供の前に立つ保育者、指導者は、常に子供たちにとっての良い手本になるということは必要不可欠である。

指導者が子供の前に立ち、頭声の良い声で歌って聴かせるという事は、「きれいな声で歌いましょう」と説明するよりもはるかに効果的であると実感している。

また、子供は音程を合わせずに好き好きに歌う事が多いが、ピアノの音をよく聴くように促し、さらに繰り返し歌って聴かせると、年少のような年齢の低い子供も、次第に音程が合うようになる。周りの音を注意深く聴くという環境づくりを行う事で、子供の聞く力を養う。聞く事で感受性が培われ、感受性と共に表現力が養われる。

その他、音程や声を整える際に、指導者が先に短いフレーズを歌い、後に続いて幼児がその模倣をすると大変効果的である。

(譜例1)  
短いメロディーを指導者が先に歌い、子供が模倣する。

(指導者)  
 (カウ見) ヤッホッホ ヤッホッホ ヤッホッホ ヤッホッホ  
 ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト  
 うたいまじゅう うたいまじゅう ラララララ ラララララ

「こぶたぬきつねこ」(作詞・作曲:山本直純)<sup>1)</sup>など、指導者の後に続いて歌う曲も、先に指導者の歌を注意深く聴いてから子供が歌うという事の繰り返しであるため、自然に音程や声を整える事ができる。

(譜例2)<sup>1)</sup>

こぶたぬきつねこ  
 山本直純 作詞 作曲

集団で歌う事に慣れ、ある程度年齢が高くなると、輪唱を用いて音楽表現を楽しむ事も出来る。

例として、「夜が明けた」(作詞:岡本敏明 フランス民謡)<sup>2)</sup>などが挙げられる。

始めは一通り歌えるようになるまで皆で歌い、メロディーをピアノでとらなくても伴奏で歌えるようになれば、指導者と子供で輪唱を行ってみる。それが上手くいけば子供同士をグループに分けて行こう。お互いの声を聴きあい、ハーモニーが生まれる事を経験する事で、歌う事の喜びや楽しみを実感する。

(譜例3)<sup>2)</sup>

夜が明けた  
 岡本敏明 歌詞  
 フランス民謡

### 【身体表現を用いた音楽指導】

歌だけではなく、身体を使って表現する事も音楽指導の一つである。

例として、音の高低を比較する際に、ピアノで高い音を鳴らした時にはバンザイをし、低い音が鳴ればしゃがむ等、高低を身体で表現するという事などが挙げられる。

その他、音楽を聴いてぞうやキリン、ウサギなどの動物をイメージしてそれぞれの動きを比較したり、スキップ、かけ足、跳びはねる等の動きを音楽に合わせて、テンポやリズムの比較を行う。これらのような、遊びの要素を取り入れた身体表現の中での音楽指導は、表現力が養われるのに非常に大きな役割を持つ。

例えば、同じ蝶の動きでも、アゲハチョウになってみたり、花の蜜を探している蝶になってみたりと、年齢が上がるにつれてより発想が広がるのが分かる。時には思わぬ行動をす事もあがるが、これらの指導の際、注意しなければならないのは、子供の表現活動を決して否定しない事である。固定観念を持った大人とは違い、子供は柔軟な発想力を持ち、それが大人には理解し難い事もしばしばある。しかし主体は子供である事を念頭に置き、子供達の表現しようという意欲を決して欠かない事が最も重要である。

### 【保育現場に於ける音楽指導の役割】

兄弟が多く、近所にも遊び友達が勢いた昔とは違い、現代は少子化の影響で、同年代の子供と触れ合う経験は保育園や幼稚園などでしかできなくなっているのが現状である。

一人で歌ったり踊ったりする事も十分な表現活動ではある。しかし、集団生活の中で、聞く・歌う・動くという活動を通して友達と楽しさや感動を共有し、また、先生に認められるという出来事は子供にとって大きな喜びであり、貴重な経験の積み重ねとなる。そのため、保育園や幼稚園は子供達の心身が豊かに成長していく上で欠かせない、貴重な場となっているのである。保育者は、その貴重な場である保育現場で、子供達の表現力を最大限伸ばす事が出来る環境を整えるよう、努めなければならない。

先に述べたように、子供にとって大人は常に手本である。その事を念頭に、まずは指導者自身が

音楽を楽しみ、音楽指導によって子供達の表現力を養うよう援助していく事が必要とされる。子供達と共に表現活動の楽しみや喜びを共有する事のできる保育者の育成を目指したい。

引用文献：チャイルド本社「やさしくひける幼児のうた」  
著者：東保 1982年4月1日 第1刷発行 <sup>1)</sup> <sup>2)</sup>

参考文献：大空社「幼児と音楽教育」編者：幼児と音楽教育研究会 1991年4月6日 第1刷発行 チャイルド本社「音楽指導計画と楽譜集 春」編者：東京都公立保育園研究会 1979年3月1日 第1刷発行

(譜例1)

短いメロディーを指導者が先に歌い、子供が模倣する。

(譜例2)

引用文献：チャイルド本社「やさしくひける幼児のうた」  
著者：東保 58頁 <sup>1)</sup>

(譜例3)

引用文献：チャイルド本社「やさしくひける幼児のうた」  
著者：東保 59頁 <sup>2)</sup>

- 2017. 10. 25 受稿、2017. 10. 31 受理 -





